



▲島づかり (無堤の吉野川上流域)



▲昭和29年洪水

背景

最近まで洪水のたびごとに水に浸かっていた吉野川上流地域では、浸水時の知恵が伝えられています。例えば、三好市池田町シマ地区も地盤が低い地域であり、昭和50年(1975)に池田ダムが完成するまでは頻繁に浸水していました。このため、地域の人々は、浸水した時に被害を軽減するよう対応する術を身につけていました。今日では浸水時の知恵が忘れられがちですが、シマ地区の古老の話は、浸水への備えや心構えを教えてください。

アクセス シマ地区 (県立三好病院周辺)

- JR池田駅より東へ約1.5km
- 三好市池田町シマ815
- 緯度経度 北緯34度01分42秒, 東経133度49分04秒



三好市池田町シマ地区は、昭和五〇年(一九七五)に池田ダムが完成するまでは、洪水のたびごとに頻繁に浸水していました。川の水が急に増して来て、半鐘が打ち鳴らされると、各家ごとに荷役を始めました。まず下の物から取りかかれと、石炭箱などを並べ、畳の上に積み重ね、履物など下の物全部その上へ上げます。そして、雨戸を締め「ツツカイ」をします。家に押し寄せてきた水の水圧で雨戸が弓のようになり、はずれるのを防ぐためです。雨戸がはずれると、家財道具が一瞬にして押し流されます。半鐘は夏には四、五回耳にしました。

昭和二九年(一九五四)九月の大水の時は、水位が床上一メートル以上もあつたように記憶しています。階段三段目から小便をたれ流したことを思い出します。このような大水は、出水も早いですが、引くのも早いです。引きかけたら家の中に水がある内に、流れてきた泥・雑草などを押し流し、洗い流します。これを忘れると、後で大変面倒になり、手間がかかるのです。出水時には、親戚や知人が馳せ参じ一生懸命手伝ってくれますが、いったん家の中の水が引くと、家族だけで後始末をせねばならず、とても重労働でした。壁は流され、竹で組んだ骨組みばかりで、夜ともなれば隣から隣へと見透しで、提灯やローソクの光で後かたづけするのは淋しく、哀れでした。子供心にも天気が続けばと、そればかり祈っていました。不潔な泥水にびしょ濡れになった物ばかりで、不衛生この上ありません。町役場の配慮で消毒が行われ、平常どおりになるのに一ヶ月ぐらいはかかったと思います。